大きな戦争の傷跡

箱崎正美
江原町一丁目

戦争もだんだんと厳しくなり、昭和十九年暮に母と弟は身の安全と食糧難のために母の実家の新潟に疎開し、残ったのは郵政省に勤務の父と、女学校に通う姉と、中学に通う私の三人だけでした。家は信濃町の慶応病院のすぐ近くでした。

父は戦闘帽子に、カーキ色の国防服で連日のように町内会の防火訓練、バケツリレー等多忙の日課でした。姉はモンペ姿で、戦需品を作る工場に働きにいっていました。一、二年生の時は少しは勉強も出来ましたが、三年生になると軍事教練と勤労動員の日々でした。

戦闘帽子をかぶり、足にゲートルを巻いた軍事教練の銃剣術の稽古で、見習士官が大声で「お前等は国の宝だ、立派な身体を鍛えてお国のために尽くすことがお前等の責任だ。お前等は気合が足らん、歯を食いしばれ」と叫び、目の玉が飛び出るくらいの往復ビンタを叩かれました。

校庭にいる時、空襲警報のサイレンが鳴るか鳴らぬ内に敵機グラマンが低空飛行で襲来し、機銃掃射にあい、心臓が止まるくらいに驚き道路のドブに隠れて命拾いをしました。

夜は灯火管制といって、外に電気のあかりがもれないように、電灯の回りに長く黒い布を下げて細心の注意をしました。寝る時は、いつ空襲が来るか分からないので、防空頭巾、懐中電灯、リュックサック等を、布団のそばに置き、いつでも飛び出せるようにして仮眠しました。

勤労動員で町屋にあるゴム工場に働きにいきました。ベニヤの合板で上陸用舟艇を作っていました。折りたたみなので水槽で水漏れの検査をしていました。その時は無我夢中で作っていましたが、敵機が襲来する非常時に、よく鉄砲でも穴のあくようなベニヤの舟を作ったものだと、今では驚いています。

家では、床の下に父と二人で二、三坪の小さな防空壕を作り、四方と天井をトタン張りにして、洋服や着物や米など色々な品物をしまいました。いつもラジオ放送にかじりついて、耳を傾けて聞いていました。「大本営発表、我が軍は敵艦何隻を撃沈し、敵機何機を撃墜し、赫赫（かくかく）たる戦果をあげました」と、いつ

も発表された戦果を信じていました。

戦況がだんだんと悪化して、本土に敵機が飛来して来るようになると、ラジオからは「大本営発表、敵B29爆撃機の編隊は鹿島灘沖又は、房総沖を北上中、警戒警報発令」。少しすると、「敵機は帝都に接近中、空襲警報発令」とアナウンサーの声が流れます。

真っ黒な夜に、サーチライトが何本も交差し、高射砲の音がこだまし、豆粒のような我が軍の飛行機が迎え撃ちますが、敵機は高度が高いのでなかなか撃墜することが出来ません。敵機が去るまで防空壕で待機して、不安な一時を過ごしました。三月十日の大空襲の時は、浅草、向島などの下町方面が焼け、家からでも、浅草方面の方角の空が赤く燃えるのが望見出来ました。

学校の友人が、向島に住んでいましたので、住所を頼りに涙を流しながら一日中探し歩きましたが、とうとう見つかりませんでした。隅田川にかかる橋の両側から火に追われて、防空頭巾をかぶりリュックサックをかついだ人、赤ん坊を背中におぶった人など、何千何万と数え切れない人が川の中に飛び込み、水死体で川が埋まりました。地元の警防団の人が、長いカギ棒で土手に引き上げ、トタンをかけて材木で水死体を焼く煙と、筆舌につくしがたい臭気は、人生の生き地獄としか思えないくらいでした。

戦争で、罪なき人々がこれほどまでに悲惨な目にあうものかと思い、いかなることがあっても二度と戦争をしてはならないと思いました。

五月中旬B29の大編隊が飛来し、新宿一帯が火の海になりました。焼夷弾が、物凄い雨あられのようにシュウー、シュウーと音を立てて落ち、一瞬のうちに火の手があがり、山火事のような勢いでありとあらゆる物を焼きつくす情況は、言葉では表現出来ません。父と姉と私は、リュックサックに柱時計、下着、鍋、カマ等つめるだけつめて新宿御苑に行きましたが、御苑も火の海で入れず、御苑の横に流れる川に飛び込みました。回りからの火が熱くて川の中の水がお湯のようになり、川の中で夜を過ごしました。焼け跡に戻って見ると、二階の我が家がかけらもなく、見渡す限りの焼け野原に変わり、一夜にして街が焼失したとは信じられない思いでした。床下に作った防空壕を開けて見たら、熱のために洋服や着物がボロボロになっており、一斗缶に入れておいた米が焼け米となり、その焼け米が、当分の間は食事の一助になり、何が役立つか分からないものです。

中学生の時に受けた大きな戦争の傷跡を、人生の試練の踏み台として、常に人間の命の尊さを知り、常に愛と感謝を持って、一日一日を大切に生き続けてゆきたいと思っています。